

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月24日現在

機関番号：24402

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22760469

 研究課題名（和文）都市再生手法としての戦後建築の活用に向けた基礎的研究
 —大阪都市部を事例として—

 研究課題名（英文）A FUNDAMENTAL STUDY ON UTILIZATION OF THE POST-WAR ARCHITECTURE
 AS URBAN REGENERATION METHOD, A case of the central area of Osaka city

研究代表者

高岡 伸一（TAKAOKA SHINICHI）

大阪市立大学・都市研究プラザ・特任講師

研究者番号：40433320

研究成果の概要（和文）：戦後の復興期から高度成長期にかけて日本の都市部に建てられた建築（戦後建築）の活用による都市再生を推進するため、大阪の都市部を事例として、（1）密集市街地に建つ小中規模ビル（2）大通りに面して建つ大規模ビル（3）駅前の再開発ビルの3つのパターンについて調査を行い、これまで着目されることのなかったそれぞれの建築的な特徴を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This paper aims to clarify the architectural characteristics of Post-war architecture in the central area of Osaka city as a case study. The 3 patterns are as follows: (1) small-mid size buildings in densely built-up area. (2) big size buildings in a main street. (3) buildings by station front area's redevelopment project.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	200,000	60,000	260,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：工学

科研費の分科・細目：建築学、建築計画・都市計画

キーワード：戦後建築、大阪

1. 研究開始当初の背景

既成市街地の再生は日本の各都市が共通に抱える大きな課題である。そして持続可能な都市の実現のためには、従来の再開発に代わる多様な手法が求められる。例えば今も既成市街地の多くを占める戦後復興期から高度経済成長期に建てられたビル建築（以下「戦後建築」）の積極的活用の推進は、その有効な手段となるだろう。しかし戦後建築については、基礎調査すら十分に行われていないのが現状である。

2. 研究の目的

大阪の都市中心部を事例に、戦後建築について建設の経緯やその建築的特徴など基本的調査を行い、その特徴を明らかにすることで、今後活用を推進していく上で必要となる評価指標確立のための基礎資料を整備する。

3. 研究の方法

大阪市の中心市街地を対象に、戦後建築を3つのパターンに分類して、それぞれについて文献資料や現地調査、関係者のヒアリング等によって、その建設の経緯と建築的特徴を明らかにする。

(1) 密集市街地に建つ小中規模のビル建築
大阪の歴史都市であり、明治以前の町割は今も残す北船場地区(大阪市中心部)に建つ現存の戦後建築を調査し、密集市街地に建つ戦後建築の建築的特徴を明らかにする。

(2) 大通りに面した大規模のビル建築
大阪のメインストリートである御堂筋に面して建つ戦後建築のうち、土佐堀側以南から中央大通りまでの業務地区(大阪市中心部)の大規模ビルを対象に、過去に建てていたものも含めて歴史的な経緯を調査し、大規模な戦後建築の建築的特徴を明らかにする。

(3) 駅前再開発ビル
市街地改造法適用第1号となった大阪駅前市街地改造事業によって建設された大阪駅前第1ビルから第4ビルまでを対象に、長期にわたって設計と建設が行われる再開発事業における戦後建築の特徴を、文献資料等にとって建設過程を跡づけることによって明らかにする。

4. 研究成果

(1) 北船場に建つ小中規模の戦後建築
北船場地区は豊臣秀吉の時代にその都市開発の歴史を遡ることのできる歴史都市であり、当時に形成された約80m角の町割が街区として今も残る。第二次世界大戦の空襲によって焦土と化したのが、戦後復興期から高度経済成長期にかけて、従前の間口の狭い町家の町割に従って、大量の小中規模のビルが建設された。

現在北船場地区には約1300棟の建物が建っているが、そのうちの500棟を調査したところ、密集した既成市街地に建つ戦後建築の特徴として、①4階建て程度の階数②ファサードの両端に袖壁を有する③水平連続窓の開口部④ファサードの外壁はタイル張り⑤1階開口部にガラスブロックを使用、といった特徴が多く、戦後建築にみられることが明らかとなった。①については、道路斜線からいけば船場建築線の存在によって5~6階まで建てられるところ、自家用に建てられたビルが多いために必要な面積だけを建てて4階程度となっていることが主な理由と考えられる。②袖壁の存在はこの規模の戦後建築のファサードデザインを特徴付けるものとなっている。木造町家の袖卯建、また過渡期に見られる木造の看板建築ビルの袖壁と形態的な類似性をみてとることができるが、その関連性については明らかではない。この点は今後の研究課題である。③の水平連続窓は、規模に関わらずこの時代のビル建築一般にみられるファサードの特徴といえるが、小中規模のビルにその傾向は顕著である。理由としては建設上の効率的な工法であることと、

間口が狭く奥行きが深い敷地にあつては、有効な採光が前面道路からしか確保できないため、窓の採光面積を最大化した結果水平連続窓が採用されたものと思われる。④各階の水平連続窓の間の壁仕上げには、タイルがよく用いられている。タイルは小口の釉薬タイルが一般的で、これは当時竹中工務店が盛んに採用した有田焼の茶窯変乾式磁器タイルに端を発して一般化したものと考えられる。また、高級タイルとして知られる泰山タイルもみられる。⑤については、道路幅の狭い密集市街地では、開口部から内部が覗かれる恐れがあるため、自然光を取り入れながらも視線を遮るガラスブロックが多用された。木造町家における格子と同じ機能が求められたものといえるだろう。

密集市街地には町家の町割に従って建てられた小規模なビルが多く残り、1階の開口部にガラスブロックを採用し、両端に袖卯建のような袖壁を有するものが多くみられた。その中には最上階を住居としているもの、またかつて住居だった事例も複数見られる。この調査結果は、戦後町家とも呼ぶべき建築類型の存在を示唆するものと考えられるが、確定的なものとするためには、今後の更なる研究が必要である。

(2) 御堂筋に面する大規模戦後建築

(1)と同様に御堂筋も空襲によって大きな被害を受けた。御堂筋といえば100尺(31m)で高さの揃ったスカイラインが歴史的な特徴としてあげられるが、当初から揃っていたわけでは勿論なく、戦後復興期に建てられた建築には低層のものが多い。高度経済成長期に入り、いわゆるビルラッシュとなってから高さ31mのビルが建つようになり、ようやくスカイラインが揃ったといえるようになるのは1970年あたりである。その後2001年には高さ制限が緩和されるので、御堂筋のスカイラインが揃っていたのは、約30年の期間ということになる。

御堂筋沿いの敷地の大きさがほぼ揃っていることや、高さ等の制限と建設主のニーズのバランスなどから、形態的にはほぼ同じボリュームの建築が建ち並ぶことになり、それが御堂筋の景観の基調をなしている。しかしその歴史的経緯を跡づけてみると、ファサードのデザインについては必ずしも統一されていたわけではないことが明らかとなった。特に高度経済成長期に建てられたビルのファサードを比較すると、そこには統一というよりむしろ多様性が読み取れる。特に基準階の仕上げに関しては、タイルを中心に金属素材や石材など多様な仕上げが選択されており、近年建設されたビルの仕上げの主流である花崗岩は、この時期に必ずしも基調となっていたわけではないことがわかる。ま

た、色彩についても赤や茶などのバリエーションがみられた。

現在御堂筋のビルの仕上げとして統一的に採用されている花崗岩については、1970年以降、御堂筋の景観美が強く意識されるようになって行政指導による高さの制限が続けられ、その後高さ規制の緩和と同時に外壁の意匠に関しても景観誘導が行われるようになった結果、花崗岩のファサードに収斂していったものと考えられる。また、その背景には建築工法の発展により、大規模オフィスビルの外壁としてカーテンウォールが普及していくことで、デザインパターンとしてはいくつかのバリエーションは見られるものの、同一工法による制限によってファサードが均質化していったことも明らかとなった。

(3) 大阪駅前市街地改造事業

大阪駅前市街地改造事業は、大阪駅の南側に位置する約6haの計画地を対象に、大阪駅前第1ビルから第4ビルまでの4棟の高層ビルを建設したものである。戦後に広がったヤミ市のクリアランスを大きな目的として、1961年に制定された市街地改造事業法の適用第1号となり、その後紆余曲折を経て、約20年の長期間をかけて完了した。大阪の戦後都市史を代表する再開発事業のひとつである。

東畑謙三によって描かれた当初のマスタープランは、4棟全てが高さ、形態、デザイン共に統一された「反復の美」を強調するものであったが、社会や周辺環境の変化に応じて計画変更が重ねられ、最終的には高さや仕上げの異なる4棟のビルが並ぶ結果となった。

最も変化したのは建物高さである、特に第3ビルは当時西日本最高の高さを誇った。これは建設技術の進歩と都市部の高度利用が求められて日本に超高層ビル時代が到来したことを受けて、本事業も高層化が図られたものである。この時点で「反復の美」は失われた。

また、当初の計画では動線計画、特にモータリゼーションを強く意識した歩車分離を立体的に処理し、低層部の屋上を駐車場として車路を各棟間で連結、構想としては高架道路で直接アプローチする案も計画されていた。しかし計画が進むにつれて駐車場として構想されていた屋上に広場空間が設けられるようになり、第2ビルでは屋内に巨大な吹抜の噴水広場が設けられ、第3ビルと第4ビルの東側には、御堂筋に面して広場が計画変更によって実現した。これらの広場空間の設置は総合設計制度の導入による設置義務によるものであるが、低層部屋上の広場への歩行者動線を新たに追加したり、御堂筋に面した空地をシンボル広場と位置付けて綿密な検討が重ねられるなど、人が集う広場の存在

が重要性を増していった過程が読み取れる。計画当初の1960年代においては動線のスムーズな処理に重点が置かれたが、時代を経るにつれて人々が滞留する広場の空間が重視されるようになっていったと、その経緯をまとめることができるだろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

- ① 高岡伸一、前現代建築の建築的特徴が生み出す活用価値について-大阪都心部を事例として-、前現代都市・建築遺産計画学的検討〔若手奨励〕特別研究委員会 報告書、日本建築学会、査読無、2103、pp.25-28
- ② 高岡伸一、身近にある前現代建築の魅力とその活かし方、2012年度日本建築学会(東海)「前現代」の都市・建築遺産としての可能性を問う、日本建築学会、査読無、2012、pp.17-20
- ③ 高岡伸一、戦後から高度成長期のビル、ビルとまちづくり-大阪“再生”に向けて-、大阪ビルディング協会、査読無、2010、pp.10-17

〔学会発表〕(計1件)

- ① 高岡伸一、前現代都市・建築遺産計画学的検討〔若手奨励〕特別研究部門パネルディスカッション、日本建築学会大会(東海)、2012.9.13、名古屋大学

〔図書〕(計1件)

- ① 高岡伸一、阪口大介、夜長堂、姉崎由美子、岩田雅希、パイ インターナショナル、いいビルの写真集 west、2011、201p

〔その他〕

- ① 講演、高岡伸一、御堂筋と近代建築、御堂筋まちづくりトーク、アイスポット、2013.2.3
- ② 新聞連載、高岡伸一、阪口大介、夜長堂、姉崎由美子、岩田雅希、週刊ビルマニア、産経新聞関西版夕刊、2012
- ③ 連載、高岡伸一、都市美を伝えて-朝日新聞と中之島の130年-、月刊島民 中之島、月刊島民プレス、2012
- ④ TV出演、高岡伸一、大阪・船場～大都会に残る奇跡の歴史建築、百年名家、BS朝日、2012.2.3 放送
- ⑤ 講演、高岡伸一、朝日建築の魅力と歴史、アサヒ・ファミリー・ニュース、朝日新聞社ビル、2012.8.28
- ⑥ 講座、高岡伸一、大阪名建築ものがたり全6回、毎日文化センター、2012

6. 研究組織

(1) 研究代表者

高岡 伸一 (TAKAOKA SHINICHI)

大阪市立大学・都市研究プラザ・特任講師

研究者番号：40433320